

Title	言語の座 : ソシユール言語学における言語の理論的役割について
Author(s)	小林, 卓也
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 173-188
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5223
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究ノート〉

言語の座

——ソシユール言語学における言語の理論的役割について

小林 卓也

〈要旨〉

Fe. ソシユール (1857-1913) は『一般言語学講義』(以下『講義』)のなかで、「言語とはなにか」という問いを提起する。ここでは、言語が社会的生産物であること、および言語が言語活動から区別されることが述べられる。しかしながら、ここで用いられている社会という語の意味も不明瞭であり、またどのような意味で言語と言語活動の区別が可能であるのかということについても明確に示されていない。これは、『講義』という書物が編者によって加筆修正されたものであり、したがってソシユールの真意を反映したものではないことに起因するだろう。しかし、残された草稿および聴講生らによる講義の記録を参照することで、言語の社会性、および言語と言語活動の区別ということに対してソシユールが与えた意味を復元することは可能である。

本稿ではまず、「ホイットニー追悼文」(1894)の分析から、ソシユールが社会という語に、自然的関係および個人の意志的行為の排除という二つの意味を与えていることを確認する。そのうえで、『講義』において社会が言語と結びつけられる意味を、マエングラーによる『講義(校訂版)』およびロコンスタンタンに

よる『第三回講義記録』を用いて明らかにしたい。これによって、ソシユール言語学における言語の理論的位置、ならびに、理論と対象に関するソシユールの認識論の一端を示すことが本稿の目的である。

キーワード

認識論、言語、社会性、音響イメージと観念の結合、個人

ソシュール研究の課題と現状

現在、フェルディナン・ド・ソシュール（一八五七・一九一三）を研究するうえで主な課題とされているのは、以下の二点である。第一に、ソシュールが一九〇七年から一九一一年にかけてジュネーブ大学にて行った「一般言語学講義」を復元すること、第二に、それを踏まえたうえでソシュールの思想の全貌を明るみに出すことである。前者の課題を遂行するためにまず参照すべきは、一九五五年に発見されたソシュールの自筆のノートおよび聴講生たちの講義ノートを分析した Godat(1957)、さらに、ソシュールの死後出版された『一般言語学講義』〔以下、『講義』と略記〕の本文と原資料、聴講生のノートを見開きページ上に並置させることで、それらの対応関係を明らかにしたルドルフ・エングラールによる『一般言語学講義校訂版』〔以下、『校訂版』と略記〕である。エングラールとシモン・ブーケが *Ecrits de linguistique general* の序文において述べているように、これら二つの資料はソシュール研究における注釈的研究の時代を開く画期的なものであった (ELG II)。この注釈的研究に加え、聴講生らによるノートを年代別に編纂した Sausser(1993a, 1996, 1997) および Sausser(1993b) を参照することで、ソシュールが実際に行った「一般言語学講義」を再現することが可能となった。

また、後者の課題であるソシュールの思想の独自性を画定するためには、こうした「一般言語学講義」の復元作業に加え、より多角的な側面からの研究が必要とされる。これまでの研究で顕著なものを挙げれば、ソシュールが「一般言語学講義」と平行して行っていたアナグラムに関する研究を重点的に論じた Starobinski(1971) や、社会学や自然科学といっ

た言語学以外の影響関係を検討した Koerner(1972) などが代表的であろう。そして Bouquet(1997) は、ソシュールを「講義」との連関で捉えるのではなく、より広い人文科学一般、とりわけ比較文法学がひとつの科学として成立する条件を探求するというソシュールの認識論的側面を描き出すことで、その思想の理論的広がりをもたらした画期的な業績であるといえる。また先に挙げた、エングラールとブーケによって編纂された ELG は、一九九六年にソシュール家のジュネーブの邸宅から発見された、ジュネーブ大学の図書館に寄託されていた新資料を旧資料と共に編纂し出版したものであるが、これらは、ソシュールが言語という対象に見出していた認識論的問題、哲学的問題の一端を知る重要な資料である。これに加え、ソシュールが残したテキストにおける文献学的な有意性の基準を Kyriak(2007) が提起している。これを文献学的基準として遵守しつつ、上記二つの課題を検討し進展させることがソシュール研究の喫緊の課題であるとわれわれは考えている。⁽¹⁾

これらの先行研究を踏まえれば、ソシュールの言語学が、単に言語学の枠内に留まるものではなく、広く人文科学一般の認識論的基礎づけに向けて、きわめて体系的な理論体系を構築する試みであったことが理解される。そして、講義や手稿、草稿の至るところでソシュールが幾度となく強調しているのが、彼が対象とする言語そのものが持つ両義的な特性に他ならない。言語は、音と観念、物理的側面と心的側面、個人と社会といった本質的な二重性を常に伴っている。⁽²⁾ しかしソシュールにとって言語の本質的な両義性は、より認識論的な問題を提起するものでもあった。

ソシユールの認識論—理論と対象

すなわち、言語学者としてのソシユールにとって、言語 [Langue] こそ、その本性が問われるべき対象であると同時に、それは自身が構想する「来るべき言語学」(ELG 6) が、厳密な科学理論として構成された結果として、はじめて立ち現れる帰結でもある。「唯一、事物を作り出すのは視点であり」(ELG 20)、言語は決して直接的な所与として与えられるものではない。つまり、言語は常に理論的な視点との相関関係のなかでのみ捉えられる。これは、初期の段階から一貫するソシユールの認識論的主張である。同時に、言語学において、言語それ自体を特権的に捉えうる視点など存在しないということを強く意識していたのもソシユールに他ならない。⁽³⁾ こうした認識論的な困難さをそのまま反映するかのようには、ソシユールはいくつもの原理を作り出し、いくつもの交錯しあう視点を含む複雑な理論体系を作り上げる。

ソシユールが提示した原理や方法は、したがって、理論と対象との相関関係においてのみ意味をもつ。だからこそ、恣意性の原理、共時態と通時態といった概念は、ソシユールの言語学を離れては意味をなさない。まして、ソシユールの意に反して経験的な視点を暗に持ち込み、彼のいう言語をわれわれが使用している日常的な言語の実態であるかのように考えることは端的に誤りだ。われわれにできることは、ソシユールの思考体系の全体を明確にするとともに、その先に立ち現れる理論的对象としての言語がどのような様相で存するのかを記述することだけである。

そこで本稿では、こうした本質的に両義的な言語という対象が、ソシユール言語学においていかなる理論的役割を果たしているのかを考察

する。そこでわれわれが着目するのが『講義』における「言語とは何か」という問いである。ここでは、言語が社会的生産物であることが明言されている。しかし、ここでソシユールは、社会という語に独自の意味を与えている。われわれはまず、「一般言語学講義」に先立つ一八八四年に執筆された「ホイットニー追悼文」を分析し、そこからソシユールが社会という語に与えている独自の意味を明らかにしよう。その上で、『講義』における先の問いに回帰し、「言語が社会的である」ということの意味を明確にすることによって、ソシユールが「来るべき言語学」をはじめめるために、理論的に位置づけた言語の場所を理解すること、これが本稿の目的である。

一 『一般言語学講義』における「言語とはなにか」という問い

「言語とはなにか」という問いは、『講義』の冒頭、第三章「言語学の対象」第一節「言語、その定義」において、次のように提起されている。

ところで、言語 [Langue] とはなにか。われわれにとつてそれは、言語活動 [Langage] と混同されない。本当のところ言語とは、言語活動における規定され、本質的な一部にすぎない。それは、言語活動という能力の社会的生産物であると同時に、個人においてこの能力の行使を許すべく、社会体によって採用された必要な慣習 [conventions] の総体である。(ELG 25)

すでに多くの論点が含まれている。しかしこの時点では、なぜ言語活

動と言語が区別されるのかも、概念間の関係も不明瞭のまま残されているために、これをもって言語の定義とするのは困難である。しかもこの表現は、社会的生産物としての言語が個人に先立って外在し⁽⁴⁾、それがあたたかも個人に対して強制を行うにもかかわらず、個人の言語活動が言語を生産するという、奇妙な悪循環に陥っている印象を与える。しかし冒頭でも述べたように、言語が個人に対して実体的に外在するという主張ほど、ソシュールの認識論にそぐわないものはない。では『講義』におけるこの言語への問いかけは、いったいなにをいわんとしているのだろうか。

まず、史実的な側面から確認しておかなければならないことがある。この問いが記されている『講義』という書物は周知のように、ソシュール自身の手によって書かれたものではなく、彼の手稿や講義ノート、および聴講生らによる講義記録をもとに編纂されたものである。松沢(1998)は、編者間で取り交わされた書簡ならびに編集手記を詳細に分析しているが、これによれば、『一般言語学講義』が編者の極めて恣意的な作為によって構成されたものであるということがわかる。

また、そもそも、ソシュールがこの言語への問いを提起したのは、一九一〇年から一九一一年にかけて行われた第三回目(「一般言語学講義」内)のことである。さらに、『校訂版』および『講義』の編者たちが参照できなかった聴講生のひとりであるエミール・コンスタンタンによる第三回講義ノートを参照すれば、「言語とはなにか」という当該の問いに関するこの部分が、一九一〇年一月四日の講義と、一九一一年四月二五日の講義の一部とを短絡的に結びつけ、作成されたものであり、

そもそも「言語、その定義」という表題自体が編者による加筆であることがわかる。したがってこの「言語とはなにか」という問いは、『講義』に記されているように冒頭に置かれるべき発端の問いではなく、ソシュールが数年の講義を経て積み重ねていった思考過程の帰結として発せられたものなのだ。

しかしながら、だからこそ、この「言語とはなにか」という問いには、『講義』以前のさまざまな手稿や草稿で展開されたソシュールの考えが凝集的に反映されている。したがって、われわれはむしろこの部分の不明瞭さを、ソシュールの議論に従って明確にすることで、彼自身の理論的姿勢を理解することができると考えている。

こうした史実的事実を踏まえたうえで、われわれはまず、ソシュールがここで社会という語に与えている意味を明確にし、言語への問いにおいて個人と社会が対比される理由について考察しよう。

二 言語における社会性とはなにを意味するのか

あらかじめ指摘しておく、言語が個人に帰属するのがあるいは社会によって強制されるのかという、いわゆる言語の起源に関する問題は、ソシュールにとって擬似問題に過ぎない。一八八四年ごろに執筆された「書物の草稿」と呼ばれる手稿においてソシュールは、言語が慣習的かつ恣意的であることを確認したうえで、しかしながら言語それ自体からすれば、それは「自身の領域で先行していたものの産物であり、恣意的でも自由でもない」(BLG 202)と述べている。すなわち、「こうした「言語」というものは、四六時中中断することがありえず、いまも、そのあ

らゆる要素が何度も繰り返されている」(ELG 202:「内は引用者による。言語はいかなる瞬間、いかなる場所においても決して断絶することなく常に連続しているのであって、そこには始まりも終わりもない。この意味において言語の起源問題には意味がなく、ましてソシユールが述べているように、「言語が社会的であるか知らないか知ることなど、われわれにとっては意味がなす」(ELG 202)。

また、ソシユールにおける社会という概念の出自については、Doraszewski(1931) & Koerner(1972)によつて、非常に早い段階からデュルケム社会学などの影響が指摘されているが、本稿では、ソシユールがアメリカの言語学者W・D・ホイットニーの追悼文集のために執筆した「追悼文」を参照する⁽⁶⁾。この「ホイットニー追悼文」(1984)では、言語における社会的特性が重点的に論じられており、ここからソシユールが社会という語に与えた独自の意味を明確に理解することができるからだ。

制度としての言語

ソシユールによれば、言語は人間の制度であるとするホイットニーの主張こそが、「言語学の基軸を変えた」(ELG 211)。ホイットニーの主張は、言語を人間の外部においてそれ自体存在する有機的組織や物理現象であるとするシュライヒャーら旧世代の言語学の批判を主眼としている。言語とは、国家の法や政治体制、服装の様式などと同じく人間の制度であり、それは常に人間の身体や生活環境、すなわち、「事物の自然的関係に(様々な度合いにおいて)もつづいている」(ELG 211)というのがホ

イットニーの主張だ。しかし、ソシユールはここで、制度としての言語というホイットニーの主張に、言語だけは人間の制度でありながらも異質な制度であるという点を付け加える。ソシユールによれば、言語だけが例外的に一切の自然的関係や外的事物と関わらない制度である。なぜなら、「齒に擦れるある一定の音と、s という文字との間には、いかなる瞬間においてもいかなる関係もなく、雄牛を指示するのに vacca という語よりも cow という語のほうがより困難だということはないからだ」(ELG 211)。

言語とは、一切の自然的関係を排除した社会的制度である。これこそソシユールがホイットニーの言語学を踏襲して導いた帰結である。これは、よく知られた恣意性の原理を示唆している(小松[1983]: 64) にも思われるかもしれないが、ここで重要なのは次の論点である。すなわち、言語は他の諸制度とは異なり、こうした非自然的特性をもつがゆえに、言語という制度だけが決して人間個人の意志的行為による修正や廃止を許容しないということだ。つまり言語は、自然的関係を剥奪されているとともに、一切の個人的な意志の介入も許容しない。ソシユールは婚姻制度を例に挙げてこれを説明している。一夫一妻制をとる婚姻制度は、一夫多妻ないし一妻多夫制よりもおそらくはより理性的である。より適切にいうと、その制度が理性的であるかどうかということを、その制度を取り巻く社会的状況などを考慮し、「哲学的に討議することができる」(ELG 214)。つまり婚姻制度は、人間の判断の裁量によって廃止ないし修正することが可能である。しかし、これに対して、ある観念を指示する任意の言語記号の是非を、事物の関係やそれらの適合関係に

もとづいて、その維持や削除を判断することはできないし意味をなさない。なぜなら、ある観念は他のどのような言語記号によって表出されようとも構わないし、観念と記号の結びつきそれ自体が、他のいずれかの結びつきよりも理性的であったり、有意義であったりするわけではないからだ。したがって、「言語活動は、人間の理性によって常に修正されたり指導されたりする規則、修正可能で指導可能な人間の規則には含まれない」(ELG 214)。むしろ、言語という制度は「非理性」[Irration]そのものにもとづいている」(ELG 214)とソシュールは判断する。

ここでソシュールは、自然と非自然の対比を、理性と非理性との対比に読み替えることによつて、非自然的制度としての言語から、個人の意志的行為の介入を排除している。いずれにせよ、これが社会的制度としての言語の特性であり、ソシュールが社会という語に与えた意味である。⁽⁷⁾

三 言語と社会

言語は非自然的制度か

われわれはこれまで、社会という語にソシュールが込めた意味について次の二点を確認した。すなわち、ソシュールは、ホイットニーが言語を社会的制度であるとしたのを踏襲したうえで、言語から自然的関係を排除し、⁽⁸⁾さらに言語から、理性的判断などといった個人の意志的側面を排除する。これがソシュールにおける社会的産物としての言語の意味であった。

しかしながら、われわれが用いる言語において、はたして一切の自然的関係は排除されているだろうか。われわれが発声を行うには発達した

喉頭部が必要であるし、文字を書き残すためには紙や岩などに刻まれる物理的な凹凸が必要である。これらはまさに自然的要素、ないしは人間が外的環境と取り結ぶ自然的関係ではないのか。言語もまた自然的関係をその要素として含んでいるからこそ、異なる諸言語の比較、さらには鳥のさえずりや手旗信号などの異なる記号体系との比較が意味をもつのではないか。こうしたことは、実証的な言語学を行う者であれば例外なく備えている認識であるだろう。

しかし、一九一〇年一月四日の講義においてソシュールが批判するのは、まさにこうした視点に立った瞬間からすでに生じている一般化「Generalisation」と呼ばれる操作に他ならない。他の学問分野には存在しない言語学の問題、すなわち、それを前に自らを位置づけるべき素材をもたないという言語学に固有の困難さを指摘したうえで、ソシュールはこう述べている。

その全面的で完全な対象を手にするのは、より一般的なものを取り上げるときだと考えるのは誤りであろう。一般化の操作はまさに抽象[abstraction]を想定し、その一般的な特徴だと明言されるものをそこから引き出すように、研究すべき対象にすでに入り込んだことを想定する。(CIII 188)

個別的な事例から一般的なものを取り出すためには、それらすべてに共通する一般的な特性がそもそも知られていなければならぬ。にもかかわらず、それをあらかじめ知ることなく事例から取り出される一般性

とは、観察者が個別的な事例の分析から無根拠に想定する単なる抽象物にすぎない。それは観察対象の一般的特性でもなければ本質的特性でもないだろう。だからこそソシュールは、互(2009)が指摘しているように、諸言語の比較から「語族」といった抽象物としての起源を想定し、それを人種の起源を結びつけるような「ロマン主義と実証主義の結託の下に成立した歴史主義」(45)を否定する。なぜならそれはソシュールにとって、「現実におけるいかなるものにも対応せず、あらゆる言語活動の真なる条件とも無関係な、まったくさまざま誤った考えを引き起こす」(CLG17)ものであるからだ。

言語学において抽象の産物を作り出さないためには、したがって、言語を社会的生産物とすることによって、言語からあらゆる自然的関係を排除し、言語の本質をあらかじめ規定する必要があるというのがソシュールの主張だ。言語の使用においてわれわれが発声器官を用いていることも例外ではない。すでにホイットニーが気づいていたように、「結局、人間が話すために、喉頭、口唇、舌を利用したのは偶然である」(CIII 196)。ソシュールの構想する言語学にとって、これらは非本質的なものにすぎずそこに言語の本質はない。

言語学における実証的視点の肯定

この意味で、言語の非自然的特性を理解することなく、諸言語から言語一般を抽出する比較文法学や、言語における物理的側面の変遷のみを扱う音声学は、ソシュールにとっては非科学的な言語学として退けられるべき学問であった(cf. CLG 13-18)。しかし、われわれが後に見るよ

うに(第五節)、前節で確認したような仕方では言語の本質が明確に規定され、それが適切に理論へと反映される限りにおいて、こうした実証的な言語学者の視点もまた肯定的に捉え返されることになる。ソシュールは考えている。この意味でソシュールの言語概念は、比較文法学を基礎づける役割を果たしている(Bouquet[1997]: 126)。だからこそソシュールは、その第三回講義において、インドヨーロッパ語族に属する諸言語の詳細な分類に関する講義を行い、実証的な言語学者の視点が言語学にとって不可欠なものであることを強調する。さらにエングラシーによる『校訂版』や聴講生のノートに記されているにもかかわらず、『講義』においては一切削除された講義の一般的区分、「一 諸言語 [Les langues]、二 言語 [La langue]、三 個人における言語活動の能力と行使 [Faculté et exercice du langage chez les individus]」(CLGE 24, CIII 187)と「三 表現は、ソシュールがなによりもまず、実証的な言語学の視点を第一に置き、それを重視していたことを明かしている。すなわちこれは、実証的な言語学者の任務 [tâche] が、あくまで諸言語の観察、分類にあり、そこから本質的な言語という対象を抽出する作業以外のなにものでもなく、この抽出の方向は決して逆行することはない」ということを意味する(小野[2007]: 168)。

しかしながらこれが、比較文法学がその実証性によって隠蔽していた言語の本性、すなわち、経験的所与として与えられないものを経験的観察から引き出すというパラドクスを解消しているとはいいがたい。むしろ重要なのは、このパラドクスを正面から引き受けることこそがソシュールの出発点であったということだ。そして、この言語を対象とす

ることによって引き起こされるパラドクスを、言語学の理論体系そのもののなかに組み込むことをソシユールは試みている。その結果として、ソシユールの構想する言語学においては、常に理論と対象との相互規定性が見出されることになるのだ。われわれはこれをソシユールにおける認識論の最も重要な側面であると考えている。理解すべきなのは、ソシユールにとっては、このように常に対象に順応した理論的視点の捉え直しが間断なく行われているということであり、⁽¹⁰⁾どの点においてこうした視点の捉え返しが生じているのかということだ。

つまり、このように理論的、方法的に規定された社会的生産物としての言語を、実証的、経験的な視点に引き戻すためには、それがわれわれの経験の対象のいったいどこに位置づけられるべきなのかをまず明確にする必要がある。そして、第三回講義において、「言語とはなにか」という問いを引き継いで取り組まれるのがこの作業に他ならない。

四 言語学における言語の場所

パロールの回路における言語―聴覚イメージと観念の結合

社会的であると同時に、自然的関係も個人の意志的行為も排除されたものとして理論的に規定された言語は、いったいどこにその素材[matière]が見出されるのだろうか。一九一一年四月二十五日の講義において、よく知られた「パロールの回路」[le circuit de la parole]とともに考察されるのがこの問題である。すなわちそれは、言語学において言語が位置すべき場所を確定することを目的としている。そしてソシユールは、それを個人の精神における「観念と発声記号との結合」(CIII 188)のな

かに見出す。

パロールの回路についてはこれまでに様々な論者によって紹介されているので、ここで詳細を論じることは避けたい。しかし、簡略に述べるそれは、二人の主体のあいだで交わされる言語的活動の総体からさまざまな要因が差し引かれ、その結果として言語という対象を引き出すべくソシユールによって考案されたモデルである。ここでのソシユールの意図は、「言語的現象一般の総体としての言語活動から、言語学の具体的な対象としての言語を分離すること」(Suenağal2005J: 38)である。そして、あらゆる言語現象の総体から、言語にとってその本質でないと思われる物理的部分や生理的部分が排除され、その結果抽出されるのが「観念と発声記号との結合」である。あらゆる言語を構成しているのは、発声記号と観念の結合、すなわち、「音響イメージと観念との結びつきであり、ここに言語の本質がある」(CIII 188)とソシユールはいう。一八九四年の「ホイットニー追悼文」においては、「記号と観念との内的な関係」や「観念と象徴のあいだの根本的な協定」などのあいまいな表現や揺らぎが散見されるが、ここでは、発声記号や「音響イメージ」と観念の結合という、言語における音声的側面がより強調された表現に定位している。⁽¹¹⁾

言語と言語活動の区別

言語をこのように規定することはソシユールにとってきわめて重要な意味をもつ。ひとつには、これまで述べてきたことから明らかのように、言語を発声記号と観念との結合とすることによって、それ以外の自然的

物理的な要因が、偶然的なものとして言語から排除されることである。同時にここでは、人間の個人的な意志も排除されるため、発声器官などによる身体の調整といった能動的側面もまた、非本質的なものとして言語から排除されることになる。なぜなら、いうまでもなく、これらはそもそもそれ自体としてはすべて単なる物理現象であつて、あらかじめ言語における語と結びついていない限り「純粋に物質的なものでしかない」(CIII 188)からだ。したがつて、発声記号に見られる発声的「[vocal]」という語には、いかなる意味においても個人の能動的な部分は含まれない。だからこそソシユールはここで適切にも、より能動性という含意の少ない「音響イメージ」という表現でこれを言い換えている。

そして、ここでソシユールは、あたかも「パロールの回路」のなかから無根拠に言語という対象を抽出しているように見えるが、これは外見上のことにすぎない。そうではなく、実際には、むしろ逆に、あらかじめ理論的な言語学の対象としての言語が規定されていることが、さまざまな言語現象からその本質的部分を抽出することを可能にしているのだ。これはすなわち、実証的視点、ないし経験的視点からは、雑多な言語現象から本質的对象としての言語を抽出するという方向性をもちながら、むしろあらかじめ規定された本質的な対象としての言語がその方向性を規定しているという構成になつている。ここに理論に対する対象の規定性が見出されるだろう。すなわちここでは、社会的生産物としての言語の本質的特性、すなわち、非自然的かつ非意志的という特性にもとづいて、言語以外の偶然的要因がそこから区別されると同時に、区別されたそれらの総体が言語活動としてカテゴライズされる。これによつて

言語活動という語は、異質で雑多な要因から構成されるあらゆる言語的現象の総称を指すことが可能となる。この意味において、ソシユールにとつて言語は、言語活動から厳密に区別されるのであつて、それらが混同されることは決してありえないのだ。

個人の精神における社会的生産物としての言語

そして、さらに重要なことは、音響イメージと観念との結合としての言語が、相互に語りあう個人各々の精神のなかにも存在するということ、すなわち、非自然的かつ非意志的な社会制度としての言語を、ソシユールは個人の精神のなかに位置づけているということだ。これはすなわち、ソシユールとつて社会と個人は、まったく相対立する概念ではないことを意味する。むしろ、個人の精神というまったく非物理的、非自然的部分に言語が位置づけられることで、社会的生産物としての言語は個人に外在するのではなく、個人の生とともに厳密に一致して存立することになる。むしろ、個人の言語使用が言語の社会性という非自然的かつ非意志的特性を保証し、また、後者の特異な特性が、人間個人における言語を他の諸制度とは類比不可能な存在として規定することを可能にする。言語活動、言語、そしてパロールと呼ばれる個人における言語能力の行使が、理論的に厳密に区別されながらも、相互が緊密に結びつき、ひとつの体系を構成していることがここから理解されるだろう。社会と個人という対比に込められているのは、こうした言語的現象における各要素相互の理論的な連関なのである。

これが、『講義』に見出された言語活動と言語の区別、および言語に

において社会と個人が対比される意味であり、これらはすべて、ソーシャル言語学における理論と対象との相互規定性を表現していると思われる。⁽¹²⁾ 社会という語に独自の意味が与えられ、それが言語と結びつけられることで、言語学において偶然的なものと本質的なものを分けることが可能となる。そして、言語という特異な対象こそが、言語の個人に対するあらゆる種の外在性と、個人に対する内属性という特性が矛盾することなく同時に並立する場をソーシャル言語学に与えることを可能にしている。したがってソーシャルにとつて言語とは単なる研究対象ではなく、こうした理論的な意義をもつ両義的な対象なのである。

五 科学理論としての言語学に向けて

実証的視点の肯定

われわれがこれまで確認してきたことは、ソーシャルにおける社会性という概念の意味が自然的関係と個人の意志的行為の排除にあること、そして、社会と言語が結びつけられることで、言語は他の諸制度から厳密に区別され、その本質的な側面が明らかになるということであつた。さらにこうした社会的生産物としての言語は、第三回講義において、音響イメージと観念の結合であるとされ、個人における精神の内部に位置づけられる。これにより、言語活動から言語を区別することが可能となると同時に、ソーシャルにとつて個人と社会は対立する概念ではなく、むしろ相互的に連関する概念であることが理解された。

このような思考過程を経て理論的に規定された言語という対象が、わ

れわれの経験的对象として与えられる言語現象を規定している。しかし、同時に、この理論的对象としての言語は、単に思弁的なものとしてあるのではなく、それはあくまで複数の個人間の相互的な関わりにおいてのみ存立するとソーシャルは指摘する。すなわち、言語という理論的对象が成立するためには、「幾人もの個人によるパロールが必要である」(III 283)。この意味において「言語は最初の現象ではない」(III 283)。われわれの経験的对象として最初に与えられるのは、常に個人における言語能力の能動的な行使としての諸言語、いいかえるとソーシャルによつてパロールと呼ばれる部分である。しかしすでにわれわれが確認したように、この経験的对象が単なる物理現象ではなく、言語現象として与えられるためには、個人の精神のなかに位置づけられた社会性としての言語があらかじめ規定されていること、そして、この言語という特異な対象に応じて、実証的な視点を基礎付ける理論が構成されていることが条件となる。したがつて、先の「諸言語、言語、個人における言語能力の行使」という区分は、単なる便宜上の分類区分ではなく、それら諸概念が相互に関係し規定しあうことで、言語学という学問の可能性を条件づけていることを示している。この概念間の区別と連関を理解することによつてのみ、言語学者が出発点として取りうる唯一のものが、個人の能動的意志による諸言語の行使だけであるということが肯定される。言語学者は、その経験を可能にしている条件を認識したうえで、「諸言語を、すなわち、最大限可能な限りの諸言語を研究しなければならず、可能な限りその範囲 [horizon] を広げなければならぬ」(III 192)。

こうして、先に批判されていた一般化の操作、すなわち、諸言語の比

較からその共通部分としての言語を抽出する行為が全面的に肯定されることになる。こうした認識をふまえたうえで諸言語の観察において立ち現れるものは、必然性をもたない恣意的な抽象とは決して混同されることはない。したがって言語とは、そこにおいて諸言語からの言語の抽出を可能にする場を与えるという意味において、単なる出発点であるだけでなく、言語学における最良の基壇 [plateforme] なのである。⁽¹³⁾

言語活動、言語、個人における言語能力の行使、その区別と総合

常に、言語活動、言語、パロールは同時に与えられ、パロールは自らの成立条件である言語と共存しているにもかかわらず、われわれに対して与えられるのはその表出であるパロールの側面だけである。

ここにきてソシユールが『講義』において「言語とはなにか」と問うた部分を正しく理解することができる。つまりそこでは、言語、言語活動、個人における言語能力の行使という三つの水準が厳密に区別されていること、さらに、言語が経験的対象としてわれわれに与えられるためには、個人の能動的行為によるその表出が必要であるということが明確に述べられているのが、「言語は言語活動という能力の社会的生産物である」という表現に他ならない。そして、われわれが確認してきたように、ソシユールの言語概念において社会と個人が対立する概念ではなく、むしろ両者が厳密に結びついたものであったことを鑑みれば、言語が社会的生産物であることと、それが個人によって行使される言語能力の条件であることに、いかなる矛盾も悪循環も見出されない。むしろここには、複雑な言語現象を、理論的に区別された諸概念を相互に関

連させることで、その全体を総合的に描き出そうとする、ソシユール言語学の理論的姿勢がきわめて濃縮した形で表現されているとわれわれには思われるのだ。

結論—ソシユール言語学における二重の視点

しかしながら、これまで幾人かの研究者が指摘しているように、ソシユールは個人における言語活動の役割、すなわちパロールの重要性を認め、講義の第三部をその検討に充てると予告していたにもかかわらず、これが実行されることはなかった（丸山 [2007]: 86, 互 [2008]: 377-379）。ただこれまで確認してきたことからわれわれが理解しておくべきなのは、ソシユールが言語という両義的な対象を前に構成した言語学には、必然的に二重の視点が含まれているということだ。すなわちそれは、自然的関係や個人の意志といった一切の経験的要因を排除することで立ち現れる理論的対象としての言語に対する視点と、逆に、個人の言語能力の行使、すなわち、経験的対象としてわれわれに与えられる諸言語に対する視点である。前者が、言語活動、言語、諸言語の理論的区分を規定し、言語が諸言語をその発現として下っていく方向性を理解している視点であると同時に、それは後者の視点が諸言語から言語を抽出することを可能にしている。これら二重の視点はいずれも、それが対象とする言語の特性の違いによってその方向性の違いが生み出されている。いわば、こうした異なる二つの視点の相関がソシユール言語学における最も一般的な理論的枠組みを構成している。そしてわれわれが確認してきた言語

における社会性、および個人の精神におけるその位置づけが、この異質な視点を分離することなく緊密に結びつける役割を果たしていることがわかるだろう。

ソシユール言語学の複雑さは、われわれが理解したこの一般的な理論的枠組みの複雑さに起因する。しかし、こうした二重の視点が交錯する複雑な構成が、言語という対象そのものの複雑さに起因していることはいうまでもない。そして、その言語を理論的な対象としなければならぬ言語学の成立が極めて困難であることを誰よりも理解していたのがソシユールに他ならない。だからこそ、常にわれわれは「ソシユールにおいて言語とはなにか」と問い続ける必要がある。われわれが本稿で示したこの一般的な枠組みは、ソシユール言語学の理論的構造ではなく、むしろそのなかで、ソシユールが提示した原理や方法の意味が精査されるべき方向性を示唆しているにすぎない。しかし、この方向性に従ってのみ、ソシユールにおける一般言語学、すなわち、ソシユールのいう「言語活動の哲学」(ELG)の可能性を判断することができると思われる。

註

(1) ソシユール言語学を現代の認知科学の所見と関連させて論じた Rastier(1991) や、これらの知見を基盤としたテキスト論の構築を試みた Rastier(2005)

さらには Rastier との共同作業である Salanski(1997) による解釈学の展開が、こうしたソシユール研究の延長上にあることはいうまでもない。これに加え近年、ソシユールと二〇世紀フランスにおける構造主義との関係を再考するいくつかの研究が行われている。そのうち顕著なものとしては、Millet(2008) と Mangier(2006) が挙げられるだろう。とりわけ後者は、ソシユール言語学が、「精神的」であるが《実在的》である諸実体、非物質的であり非物質的であるにもかかわらずまさに具体的に感性的でありさえする存在者」(23) という特異な存在状態を備えた言語や言語活動を問題化していることを指摘したうえで、それが Bouquet(1997) の主張する比較文学の基礎付けという認識論的な問題のみならず、より存在論的な問題に関わるものであるという観点から、構造主義に対するソシユールの哲学的な影響力を精査している。

(2) ELG の第一部では、新たに発見された資料が「言語活動の二重の本質について」という表題のもとにまとめられている。

(3) 「われわれの命題の全体を適切に提示するためには、明確で限定された出発点が必要だろう。しかし、われわれが打ちたてようとしているのは、言語学においてそれ自体で限定された事象をたつたひとつでも認めるのはまじがいたということだ。」(ELG 198)

(4) Mangier(2007) では、ソシユールにおける社会的制度としての言語と、デュルケム社会学における社会(集団的意識)が比較検討されている。ここでは、ソシユールとデュルケムにおいては、それぞれ言語と社会性が個人的な意識に対する外在的な実在性を持つという点で共通しているということ、また、両者の用いる社会という概念の実在性の違いについて論じられている。

(5) 松沢(1968)によると、「コンスタンタンによる詳細な聴講ノートが発見されたのは、DらDの刊行された遙か後の一九五八年のことであった」(90)。

(6) しかしながら、ソシュールの社会概念はデュルケム社会学ともホイットニーの言語学とも一切関係がないというのが前田(2000)の判断である。前田氏が指摘するように、シュフライヒャーの言語有機体説を批判したホイットニーの制度としての言語という観点は、当時の言語学ではすでに主流となっていた。

(7) 本稿では紙面の関係上、言語の非自然的特性のみをその社会性の特性として取り上げた。しかし、ソシュールはこれに加え、言語だけがあらゆる他の制度とは異なり、すべての個人に対して、また例外なくすべての時間において、常に個人に関わるという、言語の偏在性ともいえるべき特性を述べている。ここで詳述することは避けるが、この特性は、言語が他のあらゆる制度の基礎であるとする主張を導くことになるだろうし、また、偏在的な言語においてなぜ変化が成立するのかという、言語における時間性に関する論点がここには含まれている。これらが、ソシュール言語学の全体像を明らかにするためには検討されなければならない議論であることはいうまでもない。

(8) 本稿の以下で検討される、「一般言語学講義」第三回講義においても次のように述べられている。「ホイットニーは、言語のなかに自然的な能力があるというふうな考えを根絶しようと欲していたのだ」。(CIII 196)

(9) 小野(2007)では、一九世紀における言語学の動向を概観し、「一般言語学」における「一般」という語は、知られる諸言語の枠がより拡張されるという意味と、言語における原理や法則を探求するという意味で用いられてい

たが、ソシュールの時代においてもなお、依然として曖昧な内容しかもちえなかったことが指摘されている。

(10) DらDの編者であるルドルフ・エンゲラーとシモン・ブーケは、その序文において、ソシュールの一般言語学が及ぶ三つの領域を挙げている。それは第一に、比較文法学や歴史音声学といった科学的実践の可能性の条件に関する批判的認識論、第二に、ソシュールが言語活動の哲学と形容する言語活動に関する分析的思弁、第三に、言説に関する将来的反省、すなわち来べき科学への賭けである。こうしたソシュールの一般言語学が可能であるためには、間断なく繰り返される理論と対象との相互規定性がその一般的条件として機能している必要があると思われる。

(11) 一九二一年四月二十八日の講義においては、聴覚イメージ「image auditive」と概念「concept」の連合という表現も見出されるが、いずれにせよ個人における発声と聴取、その両面における音声的側面が強調されていることに変わりはない。

(12) これまでの論述から明らかなように、言語活動と言語という対比は、必ずしも個人と社会の対比に重なり合うことはないと思われる。一般的なソシュール研究において言語活動は「人間のもつシンボル化能力」として理解されている傾向がある。丸山(2001)においては、言語活動が人間の潜在的な能力として規定され、顕在的な言語使用であるパロールと対比させられている。しかしながら、このように言語活動を潜在的な能力として規定してしまうことは、ソシュールが批判したような「一般化」や「抽象化」をソシュールの言語学のなかに介在させることにはならないだろうか。ソシュールがいくつかの箇所において言語活動を個人の能力として

述べていることは事実であるとしても、一方で Kyheng(2008) が指摘しているように、ソシユールが能力としての言語活動にそれほどの概念的な重要性を与えていないこと、さらに、ソシユール自身が手稿のなかで、言語活動を言語の一般化として論じているところが事実を含めて、言語活動の意味を考へる必要があるであろう。

- (13) この基礎 [plateforme] とどう表現が「コンスタタンタン」だけなソシユール・デガリエとフランシス・シモン・ゼフのノートにも書き留められている (CLG/E 30)。にもかかわらず、『講義』においてこの表現はまったく削除され、次のように知られた一節に還元されてしまっている。「なによりもまず言語という土地 [terrain] の上に腰をすべ、これをめづる言語活動の他のいろいろな表現の規範 [normes] を認める」 (CLG 25)。このから論者たちがソシユールにおける言語の理論的役割を認識してないか、それを単に言語学における出来事として理解しているか、などがわかる。

参考文献

- Bouquet, Simon, *Introduction à la lecture de Saussure*, Payot & Rivages, 1997.
- Doroszewski, W., 1931, « Quelques remarques sur les rapports de la sociologie et de la linguistique: E. Durkheim et F. de Saussure », in *Essais sur le langage*, Paris, Les Editions de Minuit, 1969.
- Godel, Robert, *Les sources manuscrites du corps de linguistique générale de F. de Saussure*, Droz, 1957.
- Koerner, E. F. K., *Ferdinand de Saussure. Origin and Development of His Linguistic Thought in Western Studies of Language*, Vieweg, 1973.

小松英輔「ソシユールの神話・伝記研究および未刊資料の公開」、『フランス語フランス文学研究』、第四三号所収、日本フランス語フランス文学会、一九八三年。

Kyheng, Rosstiza Kyheng, « Le langage: faculté, ou généralisation des langues ? Enquête saussurienne », Textol [en ligne], 2008, URL: http://www.revue-texto.net/Saussure/Sur_Saussure/Kyheng/Kyheng_Langage.html

——— « Principes méthodologiques de constitution et d'exploitation du corpus saussurien », Textol [en ligne], avril 2007.

前田英樹「一九九八年、『沈黙するソシユール』、講談社学術文庫、二〇一〇年。

Manguier, Patrice, *La vie énigmatique des signes. Saussure et la naissance du structuralisme*, Éditions Léo Scheer, 2006.

——— « Institution symbolique et vie sémiologique », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, PUF, Paris, 2007.

丸山圭三郎「一九八一年、『ソシユールの思想』、岩波書店、二〇〇七年。

松沢和宏「ソシユール『一般言語学講義』の生成批評研究にむけて」、『第三回講義』の要約をめぐって、『名古屋大学文学部研究論集「文学」』第四四号所収、一九九八年。

Milner, J.-C., 2002, *Le péripète structural. Figures et paradigme*, Nouvelle édition revue et augmentée, Verdier, 2008.

小野文「不安の継承—ソシユールとバンヴェニスター」、『思想ソシユール生誕一五〇年』第十一号所収、岩波書店、二〇〇七年。

Rastier, François, *Sémantique et recherches cognitives*, Paris, PUF, 1991.

——— « Enjeux épistémologiques de la linguistique de corpus », in *La linguistique de*

- corpus, sous la direction de Geoffrey Williams, Presses Universitaires de Rennes, 2005.
- Salanski, J.-M., Rastier, F., Ruth, S., *Herméneutique: textes et sciences*, Paris, PUF, 1997.
- Saussure, Ferdinand de (CLG), 1916, 1972, 1985, 1995, *Cours de linguistique générale, publié par Charles Bally et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger*, Edition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot, 2005.
- (CLG/E), *Cours de linguistique générale, Edition critique préparée par Rudolf Engler, tome I*, Germany, Otto Harrassowitz, 1967-1968.
- (CLG-I), *Premier cours de linguistique générale (1907), d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, edited and translated by Eisuke Komatsu & George Wolf, Pergamon, 1996.
- (CLG-II), *Deuxième cours de linguistique générale (1908-1909), d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*, edited and translated by Eisuke Komatsu & George Wolf, Pergamon, 1997.
- (CLG-III), *Troisième cours de linguistique générale (1910-1911), d'après les cahiers d'Emile Constantin*, edited and translated by Eisuke Komatsu & Roy Harris, Pergamon, 1993a.
- (CIII), *Cours de linguistique générale. Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin*, Text établi par Eisuke Komatsu, Collection Recherches Université Gakushuin N° 24, Tokyo, 1993b.
- (ELG), *Écrits de linguistique générale, text établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler*, Gallimard, 2002.
- Starobinski, Jean, *Les mots sous les mots. Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Gallimard, 1971.
- Suenaga, Akatane, *Saussure, un système de Paradexes, Langue, Parole, Arbitraire et Inconscient*, Limoges, Editions Lambert-Lucas, 2005.
- 巨薙史『フェルディナン・ド・ソシュール—言語学—の孤独「一般言語学」の歳』作品社 二〇〇八年。

La siège de la langue : sur la fonction théorique de la langue dans la linguistique saussurienne

KOBAYASHI Takuya

Dans son *Cours de linguistique générale*, F.de.Saussure questionne la nature de la langue. Mais c'est également dans ce texte que sont thématisés la socialité de la langue et la séparation entre langue et langage. Pourtant, le sens de cette socialité demeure obscur, de même qu'il n'explique pas pourquoi cette séparation est possible. Cet obscurité, comme on le sait, provient en grande partie du fait que les éditeurs de *Cours* l'ont dogmatiquement retouché et modifié. On ne peut donc pas considérer qu'il s'agit là de l'authentique pensée de Saussure. Pour en redonner le sens authentique, et mieux comprendre, en retour, le *Cours*, il faut se référer aux manuscrits autographes, ainsi qu'aux notes de ses étudiants.

D'abord nous analyserons *Notes pour un article sur Whitney* (1894), d'où nous tirerons les deux significations données par Saussure au concept de "social": ce qui exclut la relation aux choses naturelles et tout ce qui concerne l'acte volontaire de l'individu. Ensuite nous lirons soigneusement la partie du *Cours* où Saussure attache le social au langage. Enfin nous préciserons la valeur que la langue, en tant liée au social, doit avoir dans la théorie de Saussure - pour ce faire nous utiliserons l'édition critique du *Cours* par Rudolf Engler, et le *Troisième cours d'après les notes de Constantin*. Notre but sera alors d'indiquer clairement la place qu'occupe la langue dans la linguistique saussurienne, et conséquemment profiler la partie de son épistémologie qui concerne la relation entre théorie et objet.

Les mots-clés : épistémologie, langue, social, union de l'image acoustique et l'idée, individu